

一人の女性が語る戦時の話

今年十二月に二〇〇歳を迎える竹田在住の三村茂子さんより、亡くなったご主人・三村賀之男氏もらっていた戦時中の勲章等を鏡野郷土博物館に寄贈していただきました。

賀之男氏は、大正二年（一九一三）に久田村で七人きょうだいの四番目（三男）として生まれました。背が低く徴兵検査に合格しなかったため、千葉県にある陸軍工兵学校に入學したそうです。「工兵」とは、防衛陣地や道路の建設、塹壕（兵士が銃撃から身を守るための穴）掘り、敵陣地の爆破・破壊工作など戦場での土木建築を受け持つ兵科です。

賀之男氏は、満州事变従軍記事や満州国建国功労章を持っていることから、昭和六年（一九三一）頃には関東軍の工兵として従軍していたことがわかります。また、昭和十二年（一九三七）に勃発した日中戦争にも従軍しており、



三村茂子さん



三村賀之男氏（出征時の写真）

十五年（一九四〇）には勲七等青色桐葉章及び功六級金鷄勲章を与えられ、翌年には陸軍准尉に任命、勲六等を与えられています。

賀之男氏は生前、戦争の話はあまりしなかったそうですが、わずかに語った話の中で、決死隊として三回出撃したそうです。賀之男氏には兄が二人いるので家を継ぐ必要もないため、親孝行のつもりで決死隊に志願したと言われたそうです。白襷をし、水杯を交わして参加したのに死ねなかった。と語っていたといいますが、金鷄勲章は武功のあった軍人・軍属に与えられるもので、「准尉」は、士官学校を卒業していない兵士が昇進できる最高の階級であったことが

ら、賀之男氏が何らかの功績があったことがうかがわれます。

昭和十八年（一九四三）に茂子さんと結婚しますが、翌年には上海へ渡り、北洋（現在の中国の河北省・遼寧省・山東省）に行ったそうです。

その後一度帰国して千葉の原隊に戻り、一三〇人の部下を連れて再び戦地へ赴きました。平成九年に当時の部下の一人が横浜から訪ねてきたそうで、その際に語られた話では、賀之男氏はその部下に「お前は長男だから死んではいけない。生きて帰れ。」と言ったそうです。自身はかつて親孝行のために決死隊に志願しながら、部下には「生きて帰れ」と言ったというのは矛盾に感じるかもしれませんが、これこそが当時の誰もが持っていた戦争に対する建前と本音だったのではないのでしょうか。

一方、茂子さんは賀之男氏の出征中は、賀之男氏の両親や兄弟の家族たちと暮らしていましたが、時々



寄贈された勲章

は岡山市の実家に帰省し、農作業の手伝いを行っていました。その際にはB29の飛来を目撃したこともあり、昭和二十年（一九四五）六月二十九日の岡山空襲では、実家や家族は無事だったものの、帰省の道中で、死体が転がっていたり、電線に着物が引っかかっていたり、水道管が破裂して水が出っぱなしになっている惨状を目の当たりにしたそうです。

賀之男氏は終戦後、昭和二十一年五月に復員船で和歌山県の田辺港に上陸、その後は昭和五十年（一九七五）に亡くなるまで地元で建設業を営み、茂子さんは経理として補佐をされ、平成元年にダム建設により現在の地へ引っ越したそうです。

平成も残りわずかとなり、昭和がますます遠くなる中、こうした戦争体験者の証言は非常に貴重な記録として、残すべき歴史資料となっていくでしょう。

協力：三村茂子、黒瀬和子

広報かがみの9月号の記事において、左記のとおり誤りがありました。

2段目11行目
 (誤) 明和六年（二七九六）
 (正) 明和六年（二七六九）
 4段目最後
 (誤) 高宮 惇
 (正) 高宮 惇
 訂正してお詫びします。

生涯学習課 田下

電話(0868)54-7733